

各施設年次報告

芦生研究林年次報告

芦生研究林長 徳地直子

●教育研究

2013 年度における芦生研究林の利用者総数は延べ 10,500 人であり、前年より 582 人の減少であった。これは 9 月の台風により研究林への入林ができなかったためである。実習等の教育利用者数は 2,001 人で、うち学内利用が 22 件と前年と同数、他大学の利用は 3 件で 2 件増加した。また研究利用者数は 1,732 人であり、学内利用が 32 件、他大学等が 16 件といずれも微増した。学生実習のうち 2 件はフィールド研が主催し全国の大学から学生を募集して行われた。全国大学演習林協議会と連携して開催された公開森林実習では、5 大学（新潟大学、琉球大学、山西農業大学（中国）、静岡大学、東北大学）から 7 人の学生と信州大学の卒業生 1 名が参加し、うち 1 人は特別聴講生として協定に基づく単位互換手続きが執られた。この実習と同時に人間環境大学環境教育センターと豊橋科学技術大学共同フィールドワークが行われ、両大学から 7 名の学生が参加した。「森里海連環学実習 I」では、学内の複数の学部生のほか、他大学からの学生も参加した。

教育研究として、本年もシカによる植生変化に関する一連の教育研究事業を実施した。上谷の一流域において 13ha の集水域全体を防除柵で保護する試験が行われており、設置後 6 年を経過して回復が顕著になった植生のモニタリングとともに、水質に関するモニタリングも継続して実施し、卒業論文等の作成に活用された。また昨年度、概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」において開始された下谷流域の伐採試験地（スギ一斉人工林）は、間伐による植生や水質の変化を計測するとともに、そのシカの影響の観測が行われた。シカによる食害が著しい芦生研究林では、このような防鹿柵の設置と管理は、教育研究を実施する上で大変重要な業務となっており、本年度も研究林職員が積極的に柵の維持管理作業の補助を行った。一方、フィールド研の研究プロジェクトである林内の実生発生調査および採水・水質調査を継続した。

●社会連携

フィールド研主催事業として第 23 回芦生公開講座「今、森から考える」を開催した。本年のテーマは国定公園化が計画されていることを受けて「森に人がくるといふこと」とした。本年度は、京都大学の進める京大ウィークスの期間に変更され、その支援を受けて行う予定であったが、前日より各地で大きな被害を出した台風 27 号の接近に伴い、中止とした。公開講座で行う予定であった講義はフィールド研会議室において行われ、公開講座の参加者中 19 名が参加した。また芦生研究林主催事業として「芦生の森自然観察会」を春に企画した。共同開催事業としては、自然体験教室（美山町内小学校第 4 学年）、総合的な学習の時間における宿泊体験学習（美山中学校）が行われた。また、SSH で環境論（大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎）や、芦生・環境コンソーシアムとして SSH の研修が全国から高校生を集めて行われた。共団体等が主催する教育講座として、地域の宿泊施設である芦生山の家、美山町自然文化村、針畑ルネッサンスセンターからのガイドツアーを引き続き受け入れたほか、NPO 法人や地方自治体が主催する各種の市民講座へのフィールド提供と研究林内での講義、研修への協力などを行った。さらに、芦生地域有害鳥獣対策協議会によるボランティア活動に協力するとともに、北部構内において開催されたシンポジウム「知ろう、守ろう芦生の森シンポジウムー豊か

な森の再生に向けて」を共催した。

●施設の特記事項

過去のナラ枯れ被害木の倒木、枝の落下が多くなっていることから、歩道沿いの枯死木の伐倒を行った。現在、芦生研究林周辺が新たな国定公園として指定される方向で調整が行われており、国定公園化の際のゾーニングやその後の利用などについて京都府などと協議を重ねた。



公開森林実習



森里海連環学実習 I



ウツロ谷シカ防除柵のネット上げ



中止になった公開講座の特別講座

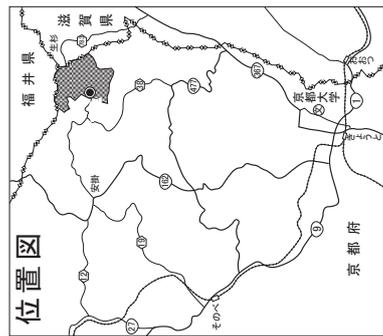
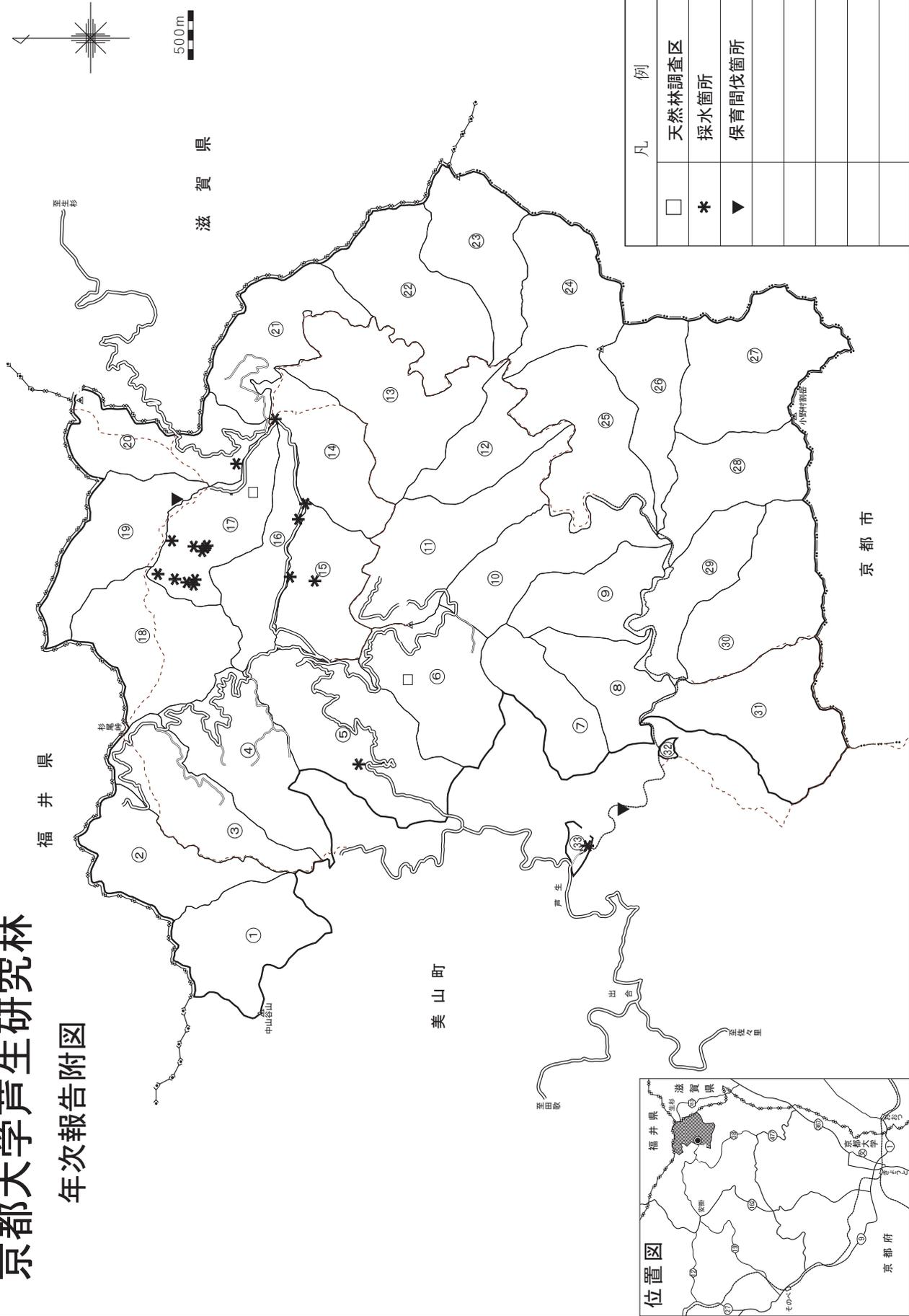


自然観察会「カシナガの説明」



宿泊体験実習「大カツラの見学」

京都大学芦生研究林 年次報告附图



北海道研究林年次報告

北海道研究林長 舘野隆之輔

●教育研究

北海道研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、2013年度もその地理的特性を生かした教育研究が行われた。2013年度は教育利用11件、研究利用17件、その他利用2件の合計30件の利用申請を受け付け、延べ2,137人の利用を受け入れた。延べ利用者が2,000人を超えるのは、北海道研究林が開設以来初めてのことである。

教育利用は、学内の実習として、全学共通および農学部の実習が3回と少人数セミナー1回が行われ、延べ578人の利用があった。「森里海連環学実習II」は北海道大学厚岸臨海実験所と共同で行い、8月30日～9月5日の7日間の日程で、本学の学生5人と、北海道大学の学生8人の計13人が参加し、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質、水生生物調査を通じて、森・里・海の繋がりについて学んだ。「北海道東部の人と自然・研究林実習III」は、9月6～13日の8日間の日程で14人が参加し、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに間伐施業などを実施した。「北海道東部の厳冬期の自然環境・研究林実習IV」は、2月23日～3月1日の7日間の日程で19人が参加し、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学んだ。また8月4～8日の5日間の日程で開講された少人数セミナー「北海道の森林」では、9人が参加し、植生と環境条件との関わりを野外観察や調査を通して学び、また間伐などの林業体験を行った。

また2013年度は、学外の実習として酪農学園大学「生態環境総合実習」の一部を受け入れ、延べ114人の利用があった。



研究林実習Ⅲ 西別岳登山



研究林実習Ⅳ 藻琴山登山



連環学実習Ⅱ 水生生物調査



酪農学園大学 生態環境総合実習

研究利用は、17 件の申請を受け付け、延べ 1,154 人の利用があった。本学 8 件延べ 498 人、他大学 5 件延べ 551 人、他機関 2 件延べ 47 人、一般 2 件延べ 58 人で、研究内容は森林の植生と土壌の関わりに関する研究、森と川の繋がりに関する研究、凍結融解プロセスが物質循環に与える影響など多岐にわたった。2013 年度は他大学教員が研究代表である科研費プロジェクトに関連して、研究員および研究補助職員の長期受け入れを行った他、農学研究科に所属する学生が修士論文研究課題のために長期滞在して研究を行った。また学振特別研究員の受け入れも行っている。

●社会連携

社会連携として、6 件の催しを実施し、延べ 207 人の利用があった。昨年度に引き続き日本学術振興会の研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の一環として、「大学の森で学ぼう 2013」を小学生（5・6 年生）、中学生、高校生を対象として行った。開催日は 8 月 1 日（木）で、参加者は 14 人（高校生 11 人、中学生 2 人、小学生 1 人）であった。また当日は日本学術振興会から事業担当委員としてノーベル化学賞の白川英樹先生他 2 人、高校教員 2 人、保護者 1 人の参加があった。

また研究林主催で行ってきた白糠区のミニ公開講座を、京大ウィークスの一環として白糠町教育委員会と共催で行った。開催日は 10 月 27 日（日）で、参加者は 39 人と過去の白糠区での社会貢献事業と比べ多くの参加者があった。沼幌小学校との共催の「木工教室」は、6 月 20 日に小学生 6 人が参加し、樹木の伐採と竹馬作りを行った。標茶町教育委員会との共催の「しべちャアドベンチャースクール ステージ 5 冬の野外活動」は、1 月 18～19 日に開催し、小学生 9 人高校生 7 人が参加し、スノーシューを着用して冬の樹木の様子や雪上の動物の足跡を観察した。



ひらめき☆ときめきサイエンス

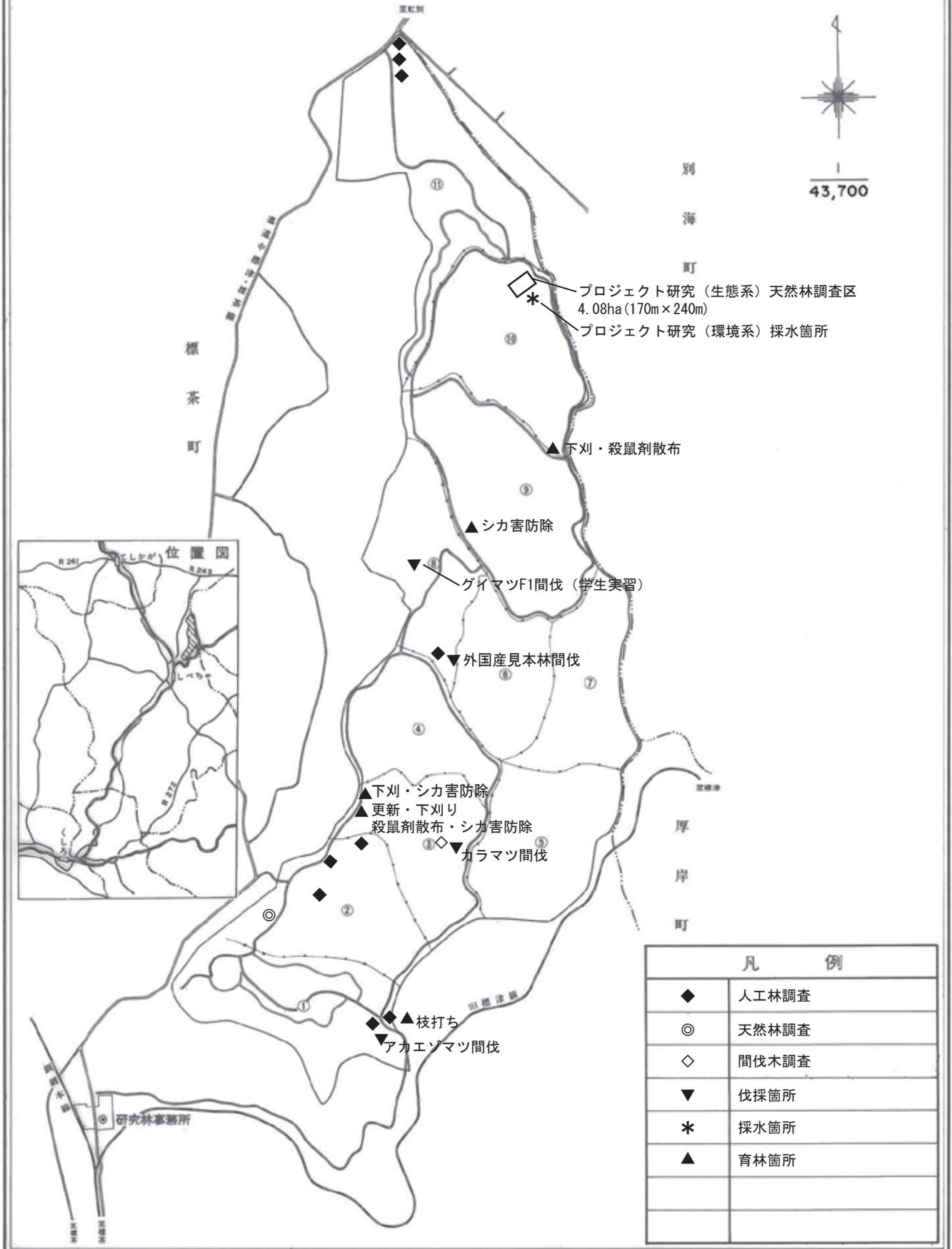


アドベンチャースクール

●施設の特記事項

今年度は、教育利用を推進するため、道内の酪農学園大学の実習を受け入れて、他大学の教育利用の推進に努めた。また研究利用については、科研費プロジェクトに関連した博士研究員と研究補助職員を受け入れるなど研究利用の推進にも努めた。また別の科研費プロジェクトが、標茶区を主調査地として進行しており、関連の研究者の来研が多数あった。また海外渡航先より帰国した学振特別研究員も勤務を始めており、研究利用が非常に盛んな一年であった。

京都大学北海道研究林標茶区 年次報告附図



凡 例	
◆	人工林調査
◎	天然林調査
◇	間伐木調査
▼	伐採箇所
*	採水箇所
▲	育林箇所

修正 平成15年10月

和歌山研究林年次報告

和歌山研究林長 長谷川尚史

●教育研究

和歌山研究林では、2013年度に11件の研究利用申請を受け付け、延べ186人日の研究利用を受け入れた（昨年比99人日増）。学内からの利用はフィールド研教職員や農学研究科、人間・環境学研究科の利用があったほか、学外からは神戸大学、宮城教育大学などの高等教育機関の調査と、和歌山県環境衛生研究センターのキノコ類に関する調査、和歌山県教育庁のカモシカに関する調査、モニタリングサイト1000事業に関連する鳥類調査が実施された。

教育利用としては7件の申請を受け、延べ178人日の利用があった（昨年比35人日増）。学内では1回生向けの少人数セミナー1件が開催されたほか、中国・四国・近畿地区大学附属演習林技術職員研修を受け入れ、野外実習および講義などを行った。また学外利用としては、有田川町内の小学校、中学校および高等学校による体験学習が行われた。高校の利用は県立有田中央高等学校清水分校による授業である「ウッズサイエンス」および「SHIMIZU TIME(森林ウォーク)」で、ウッズサイエンスでは年間を通じて合計11回の利用があった。小学校からは町立八幡小学校から「森は友だち森林の町清水」と名付けられた授業を受け入れ、技術職員を中心として対応した。

●社会連携

上記、地域の小中高の事業は、地域の活性化および人材育成に関する社会連携事業としても位置づけ、積極的に協力した。3月には有田中央高等学校と、森里海連環学を基礎とする木文化創成のための地域及び環境に関する教育の振興等を目的として、「和歌山県立有田中央高等学校と京都大学フィールド科学教育研究センターの連携協力に関する協定書」を調印し、ウッズサイエンスをはじめとする各種の連携事業の深化を図ることとした。

また昨年度から開始した、和歌山研究林の地権者であるマルカ林業（株）、和歌山県、およびフィールド研で構成する三者協議会の活動を本格化させた。三者協議会は森林経営計画の共



少人数セミナー



技術職員研修



町立八幡小学校森林体験学習

同立案をはじめ、和歌山県中紀地域における人工林の間伐を中心とする施業方法の検討、森林によるCO₂吸収に関するオフセットクレジット（J-VAR等）の導入可能性、和歌山研究林の森林を活用した森林についての知識と森林が生み出す製品と活動の価値についての森林環境教育プログラム（LEAF等）構築などを検討する場として設置したもので、本年度は「紀中流域における車両系作業システムの可能性を探る」研究会を現地検討会とともに地元関係者交えて開催したほか、地域内の路網作設および間伐作業現場の見学、さらに次年度の路網作設および作業システム調査に関する協議を行った。今後、フィールド研における研究成果を活用しながら、森林資源を活用した総合的な地域活性化を目指していく予定であり、次年度に正式な三者協定を締結する準備を行っている。

●施設の特記事項

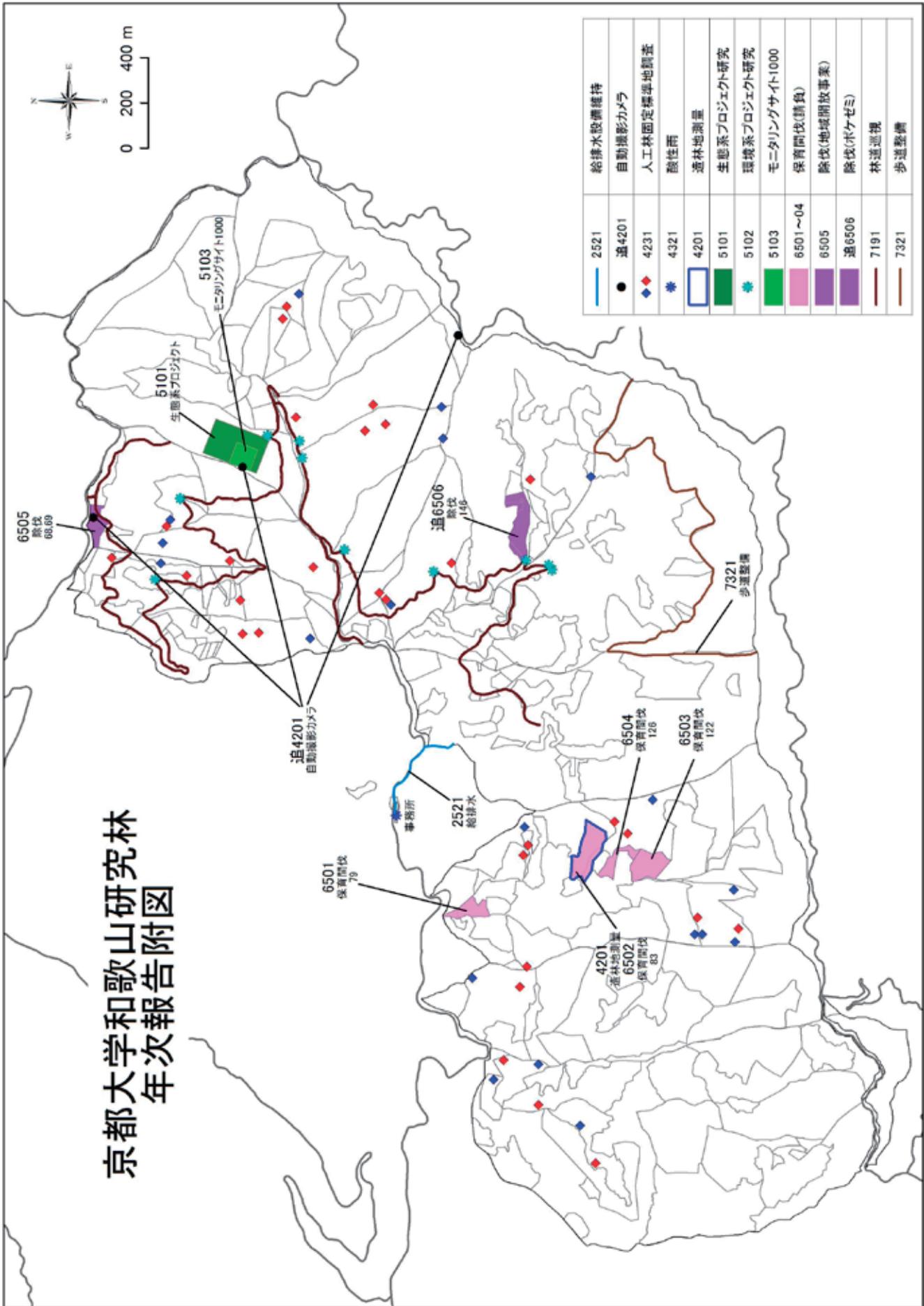
2011年 9 月 3 日の紀伊半島大水害において被災した林内路網および土場等の復旧工事が2013年11月によりやく開始された。工事完了は2015年 3 月の予定であり、徐々に利用可能な路網が回復しつつある。ただし、被災から着工までの期間に崩壊箇所が拡大、増加していることから、追加工事が必要な状況で、現在も各種の調整を継続している。また流失したバックホウ 2 機は現在も現場に置かれている状況であり、これらの処理と調達も今後の課題となっている。

一方、町内を中心に和歌山県森林施業プランナー育成研修が延べ 5 日間実施され、和歌山研究林の技術職員 2 名がプログラムに参加した。研修では持続的森林管理における壊れにくい路網作設法や路網および作業システムの設計、市場見学による木材販売を想定した森林資源の査定方法などに関する講義が実施され、これらの知識を今後の研究林運営に活用していく予定である。



森林施業プランナー育成研修

京都大学和歌山研究林 年次報告附图



上賀茂試験地年次報告

上賀茂試験地長 安藤信

●教育研究

上賀茂試験地では、2013年度の利用申請が計64件あり、教育研究に、市民の見学等の利用も加えると延べ2,502人が訪れた。

教育に関しては23件の申請があり、利用者数は892人であった。内訳は、フィールド研、農学部森林科学科、農学研究科森林科学専攻、農学研究科地域環境科学専攻、大学院地球環境学学舎・学舎等の学内の利用が13件で、学外は京都教育大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、京都府立大学、筑波大学によるものであった。また、他大学の学生を対象にした「公開森林実習－近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴－」は4回目となり、8大学から14人の参加があった。

研究に関しては30件の申請があり、利用者数は609人であった。



公開森林実習



庭園実習(京都造形芸術大学)

●社会連携

社会連携活動として、2013年度も春と秋に2回の自然観察会を開催した。春の観察会には30人、秋には29人の参加があり、応募者にはリピーターも多い。これらの活動以外にも、京都市青少年科学センターの「未来のサイエンティスト養成講座」、総合地球環境学研究所の「地球環境学の扉」、京都市北区役所の「北区民環境セミナー自然観察会」、京都自然教室の「世界のマツを観察しよう」など、学外の諸団体が主催する観察会等も積極的に受け入れた。



地球環境学の扉



北区民環境セミナー

●施設の特記事項

2000年代半ば以降に再び被害が発生しているマツ枯れは、前年度のほぼ倍となる 227 本 69 m³ (昨年度 150 本 35m³) の被害量があった。また、それに加え 30 本 22 m³ の台風による風倒被害が発生した。

ナラ枯れは、前年度よりやや減少し、21 本 13 m³ (昨年度 38 本 18m³) の被害量となった。ナイロンによる樹幹部のラッピング処理による防除が進んだ影響とも考えられる。一方、試験的にいくつかの素材を用いて、ラッピング(被覆)による被害防除の効果について比較を行った結果、メッシュシート素材のものは被害を受ける確率が高くなる傾向にあり素材の変更を行う予定である。

近年、集中豪雨時に、試験地内を通過する農業用水路が溢れ、下流の府道 40 号線で冠水被害が発生する。京都市と協議を重ねてきた結果、試験地内に仮設水路が設置された。次年度以降、府道地下の下雨水管の新設を含め、農業用水路の整備も計画されており、今後、改善されるものと期待される。

試験地では設置以来海外の 100 以上の植物研究機関と交流を持ち、種子交換業務を継続している。2013 年度には芦生研究林、旧白浜試験地、比良山(滋賀県大津市)、そして試験地内などにおいて種子採取を行った。収集した種子は、カエデ科、モチノキ科、ブナ科などが多かった。44 科 104 種を掲載したリストを作成し、39 ヶ国 138 機関に送付した(表-1)。これに対し 42 機関から、延べ 488 種の注文を受けた(表-2)。人気が高かった種は、オオイタヤメイゲツ、コミネカエデ、クロビイタヤなどであった(表-3)。

試験地では 14 科 57 種を発注した。その中心は過去から収集を続けているマツ科 31 種と、ヒノキ科 8 種である(表-4)。

表-1 リスト掲載種数

科名	種数	科名	種数		
ACERACEAE	カエデ科	9	LAURACEAE	クスノキ科	3
ACTINIDIACEAE	マタビ科	1	LYTHRACEAE	ミソハギ科	1
ANACARDIACEAE	ウルシ科	1	MAGNOLIACEAE	モクレン科	1
AQUIFOLIACEAE	モチノキ科	6	MELIACEAE	センダン科	1
ARALIACEAE	ウコギ科	2	OLEACEAE	モクセイ科	3
BETULACEAE	カバノキ科	4	PINACEAE	マツ科	1
CALYCANTHACEAE	ロウバイ科	1	PITTOSPORACEAE	トベラ科	1
CAPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	5	PODOCARPACEAE	マキ科	1
CELASTRACEAE	ニシキギ科	5	RHAMNACEAE	クロウメモドキ科	2
CEPHALOTAXACEAE	イヌガヤ科	1	ROSACEAE	バラ科	7
CLETHRACEAE	リョウブ科	1	RUTACEAE	ミカン科	1
CORNACEAE	ミズキ科	4	SAXIFRAGACEAE	ユキノシタ科	1
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	1	SCHISANDRACEAE	マツブサ科	1
DAPHNIPHYLLACEAE	ユズリハ科	2	SMILACACEAE	サルトリイバラ科	2
ERICACEAE	ツツジ科	4	STACHYURACEAE	キブシ科	1
EUPHORBIACEAE	トウダイグサ科	2	STYRACACEAE	エゴノキ科	2
FABACEAE	マメ科	1	SYMPLOCACEAE	ハイノキ科	3
FAGACEAE	ブナ科	7	TAXACEAE	イチイ科	1
FLACOURTIACEAE	イイギリ科	2	TAXODIACEAE	スギ科	1
HIPPOCASTANACEAE	トチノキ科	1	THEACEAE	ツバキ科	3
JUGLANDACEAE	クルミ科	3	ULMACEAE	ニレ科	1
LARDIZABALACEAE	アケビ科	1	VERVENACEAE	クマツヅラ科	2
		合計		104	

* 前年度採取種子6種、採取地が異なる重複種子7種含む

表-2 受注状況

地域	リスト発送数 (機関)	受注件数 (機関)	受注延べ数 (種数)	発送延べ数 (種数)
欧州	112	36	409	405
北米	14	3	29	29
アジア	9	1	50	47
オセアニア	3	2	0	0
合計	138	42	488	481

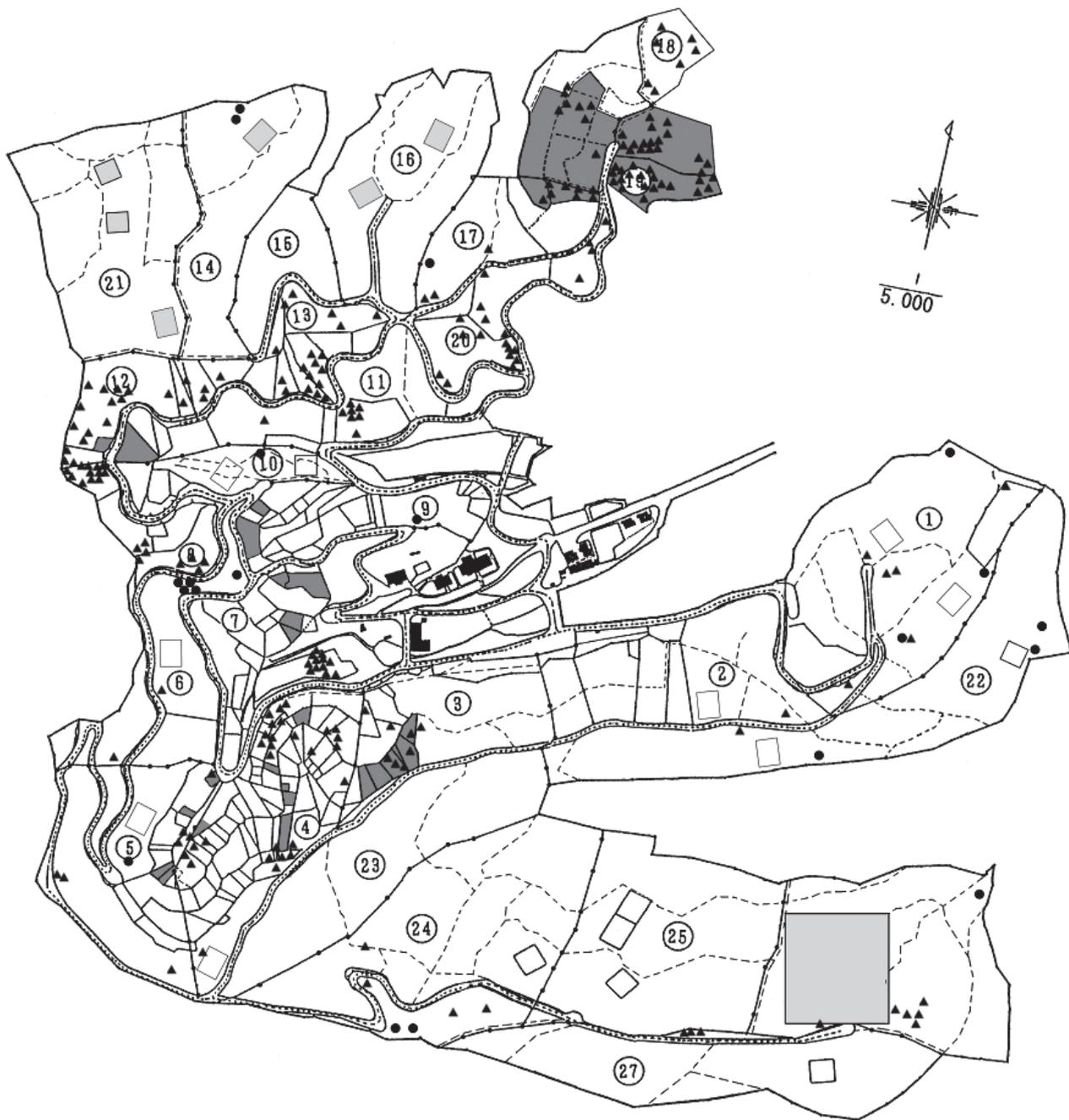
表-3 受注件数が多い上位8種

種名	受注件数(機関)	
オオイタヤメイゲツ	Acer shirasawanum	13
コミネカエデ	Acer micranthum	12
クロビイタヤ	Acer miyabei	11
トチノキ	Aesculus turbinata	10
ウバメガシ	Quercus phillyraeoides	10
ブナ	Fagus crenata	10
コハウチワカエデ	Acer sieboldianum	10
ヤチダモ	Fraxinus mandshurica	9

表-4 発注種数

科名	発注種数	科名	発注種数		
PINACEAE	マツ科	31	PROTEACEAE	ヤマモガシ科	1
TAXODIACEAE	スギ科	2	JUGLANDACEAE	クルミ科	1
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	8	LECYTHIDACEAE	サガリバナ科	1
FAGACEAE	ブナ科	5	SAPOTACEAE	アカテツ科	1
ARECACEAE	ヤシ科	1	ARAUCARIACEAE	ナンヨウスギ科	2
STYRACACEAE	エゴノキ科	1	CASUARINACEAE	モクマオウ科	1
TAXACEAE	イチイ科	1	PODOCARPACEAE	マキ科	1
		合計		57	

京都大学上賀茂試験地 年次報告附図



凡 例	
	天然林固定標準地調査
	人工林毎木調査
	マツ枯れ被害木調査
	ナラ枯れ被害木調査

徳山試験地年次報告

徳山試験地長 中島皇

●教育研究

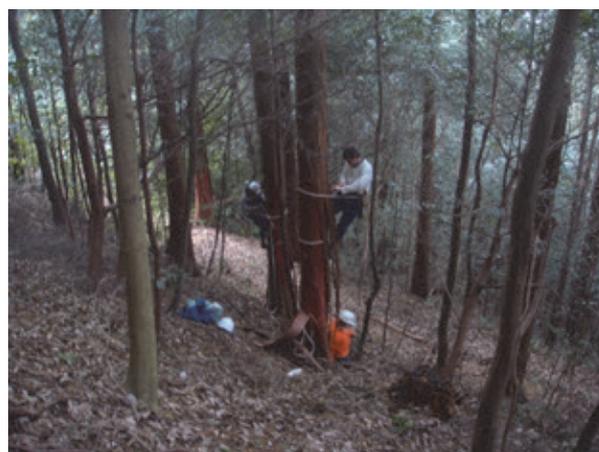
2013 年度における徳山試験地の利用延べ人数は 209 人であり、昨年・一昨年と比べて約 100 人減少した。

教育（実習）利用に関しては、延べ 35 人の少人数セミナー（ポケゼミ：全学共通科目）「瀬戸内に見る森里海連環」が昨年と同様に 3 泊 4 日（8 月 5～8 日）の日程で実施された。この少人数セミナーは、瀬戸内海地域にある徳山試験地及びその周辺において、合宿方式で人と自然との関わり方を里にある森、里にある海で実地体験し、温暖で豊かな地域における森と里と海の繋がりについて考究するものである。昨年は中国山地西部にある森林域まで足をのばすプログラムを試みたが、今年は移動時間等も考慮して従来プログラムに戻した。

研究に関する利用は 2 件（ヒノキ樹下植栽試験、生態系プロジェクト研究）で延べ 10 人であった。この他に、徳山試験地として平成 14 年から平成 32 年度末の予定で城山国有林（山口県岩国市）において実施している「檜皮採取に関する共同試験（近畿中国森林管理局山口森林管理事務所と共同）」について、徳山試験地の檜皮実験林調査を担当している坂野上なお助教も同席して、森林管理事務所の担当者と今後に向けての意見交換を行った。



ポケゼミ



檜皮採取に関する共同試験

●社会連携

周南市との連携協定締結により連携事業に関する協力・利用は増加し、2013 年度は延べ 73 人が徳山試験地を利用した。

連携講座は、昨年度に続いて第 7、8 回を 6 月と 11 月に実施し、受講者は 17 人と 18 人であった。この他に、今年度は連携事業の一環として 9 月に徳山社会福祉センターにおいて開催された周南市老人大学校での講義（森・里・海連環学 ～水と土砂～）を行い、156 人が聴講した。



連携講座（第7回）



連携講座（第8回）

連携公開講座は京大ウィークス 2013 として、周南市公園花とみどり課と協力し、初めてのフィールドワークを実施した。末武川に沿って、源流から海まで実習・見学しながら下り、森・里・海の連環を体感するという内容である。実習では 19 人の受講者が末武川で採った水の簡易水質検査（パックテスト）を体験した。参加者からの評価は高く、次回を期待する意見も多かった。

さらに周南市との連携事業の一環として、周南市立鹿野中学校の体験学習を実施した。参加した 11 名の生徒たちは、講義・自然観察・間伐体験という様々な内容の学習に熱心に取り組んでいた。



連携公開講座

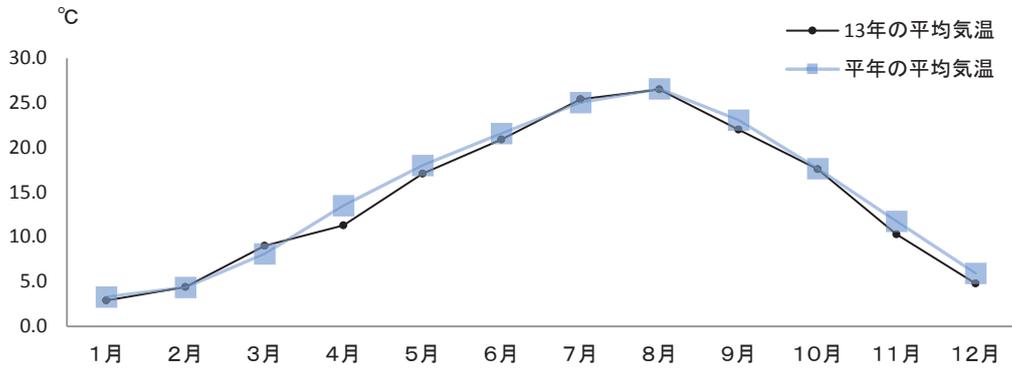


体験学習

●その他

徳山試験地は徳山市街地の北に広がる森林域の高台にあるため、周南市の水道供給区以外となっている。そのため試験地外の谷水及び試験地内の井戸水を利用しているが、近年これらの水が涸れることがあり、維持管理作業や教育活動に支障が生じている。

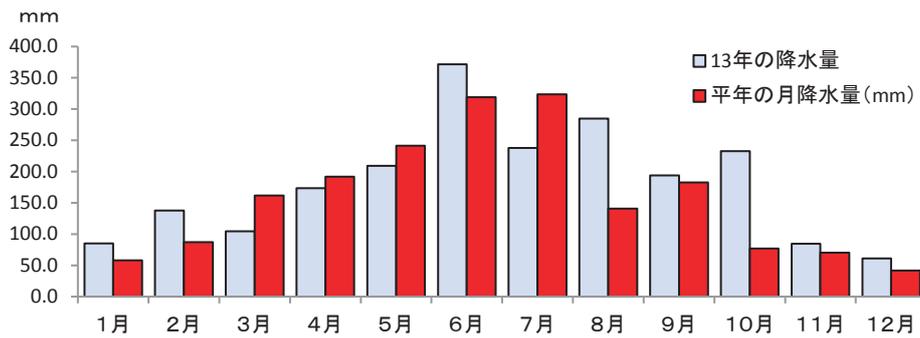
徳山試験地の気象環境



月平均気温平年対比(2013年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温(°C)	2.9	4.4	9.0	11.3	17.1	20.9	25.4	26.5	22.0	17.6	10.3	4.8
平年の平均気温(°C)	3.3	4.4	8.1	13.5	18.0	21.6	25.1	26.6	23.1	17.7	11.8	6.0

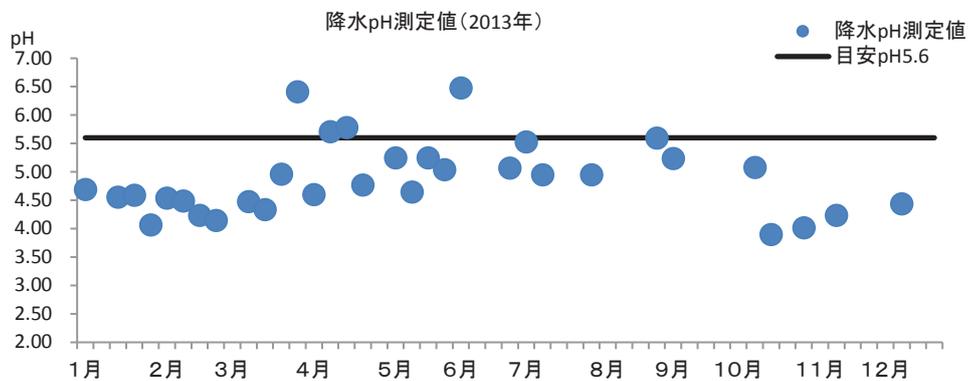
※1981年～2010年の平均気温(9時の気温) 2011年からは全日の平均気温



月降水量平年対比(2013年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
月降水量(mm)	85.0	137.5	104.5	173.5	209.0	371.5	238.0	285.0	194.0	232.5	84.5	61.0
平年の月降水量(mm)	58.2	87.1	161.7	191.9	241.3	319.2	323.7	140.8	182.8	76.9	70.0	41.8

※1981年～2010年の平均降水量



北白川試験地年次報告

北白川試験地長 吉岡崇仁

●教育研究

北白川試験地は、フィールド研の施設の中で唯一本学キャンパス内に所在する施設であることから、研究室に直結した研究が可能であり、その立地を活かした教育・研究利用ができる。2013年度には、20件の研究利用、7件の教育利用、合計27件の利用申請を受け付けた。年間利用者数は、延べ1,333人であり、フィールド研内と農学研究科からの利用が中心であった。2013年度の利用内容は、昨年度とほぼ同様であり、サワラの枝葉採取、土壌のサンプリング、植物観察等の実習や、苗畑を利用した植栽試験や温室内での鉢植えによる樹木類を中心とする植物の育成試験などであった。また、9月11日から13日の日程で実施された他大学を対象とする京都大学公開森林実習の一環として、静岡大学、新潟大学、琉球大学、東北大学、山西農業大学、人間環境大学、豊橋技術科学大学の受講生(計14人)による実習利用があった。また、一般利用での本学教職員や学生、一般市民の散策や見学による利用者も137人あり、本学キャンパス内の数少ない憩いの場として利用されている。



写真 公開森林実習

●施設の特記事項

2013年度は、通常業務として、見本樹の剪定、草刈り、境界木の剪定等を行い、特に民有地に隣接する試験地西側と北側の見本樹の剪定を重点的に行った。また近年、見本樹の高木化、高齢化に伴う幹折れや落枝による被害が発生しており、そのような被害の危険性がある見本樹は危険木と見なし、予め枝下ろしや剪定を行う必要が生じている。2013年度は学内通路沿いの高木化したラクウショウとケヤキの枝下ろしと剪定を行った。このような危険木は他にもあり、被害防止のための枝下ろしや剪定を行う必要があるが、経費が高額となり一度を行うのが難しいが、毎年度予算を計上し継続して行う必要がある。

マツ枯れによる被害は小規模ながら継続しており、2013年度はアカマツ2本が枯死したので伐採処分した。一方、ナラ枯れによる被害は確認されなかった。

9月には、試験地内に1本しかないセコイアデ



写真 危険木枝下ろし作業

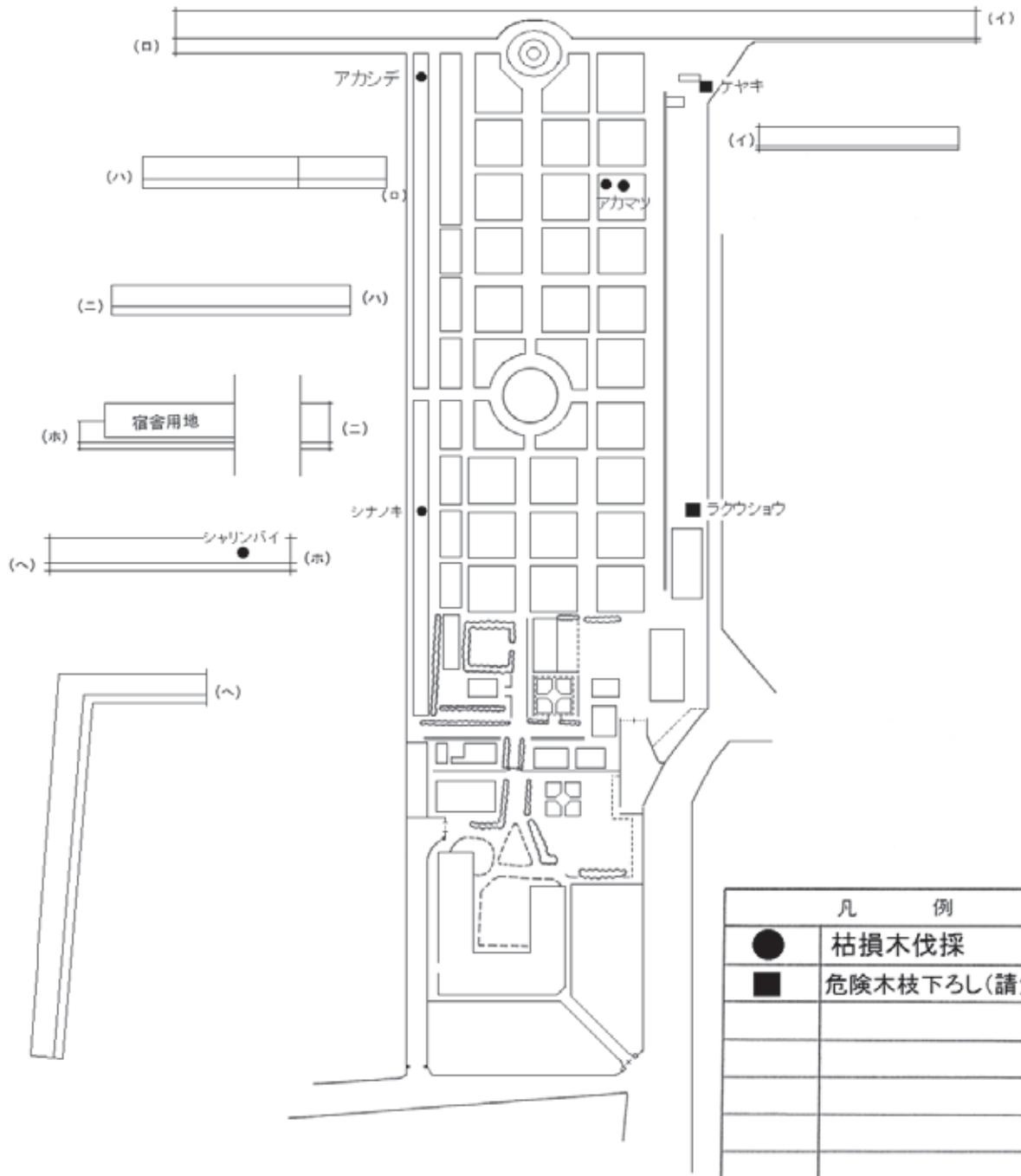
ンドロンが、台風 18 号による大雨と強風により根返りした。当試験地の個体は樹高が 12m 程度まで成長しており、国内での生育例が少ない当該樹種としてはとても貴重なものであると思われる。根返りした後も生存しているものの、大きく倒れており、元通りの状態に戻すのは難しいが、なるべく樹勢が衰えないような措置を取るとともに、接ぎ木や挿し木による後継樹の育成を試みている。



写真 台風 18 号により倒れたセコイアデンドロン

京都大学北白川試験地

年次報告附図



凡 例	
●	枯損木伐採
■	危険木枝下ろし(請負)